

# 石郷岡 英子（いしごうおか・ひでこ）

## 1、プロフィール

大正期の短歌の代表的な雑誌「黎明」で活躍し、市田と代、晁礼子とともに、「黎明」の中の女流三歌人といわれる。「黎明」後、「座標」にも意欲的に出詠している。

<生没>

1901(明治 34)年3月3日～1947(昭和 22)年4月5日

<青森との関わり>

上北郡浦野館村(現上北町)生まれ、上京して裁縫関係の職に就くが、終戦後弘前市へ疎開、同地で没する。

## 2、作家解説

明治 34 年3月、父の勤務する上北郡浦野館村の沼崎駅社宅で生まれる。野辺地中学校、弘前高等女学校を卒業し、青森市に住む。女学校時代から始めた短歌を、当時県下の指導的な位置にあった同人誌「黎明」に数多く発表(大正 10 年～昭和4年)する。

その間、大正 14 年に青森市で結婚、15 年に協議離婚、昭和3年には東京文化裁縫女子校に在学し、昭和6年には洋服裁縫所を設置していたと各雑誌の消息欄に記載がある。

「黎明」創刊5年目の大正 13 年1月から6月にかけて、本格的な歌評ともいえる南蘭子の『妄言数章』が5回連載され、9人の歌人中の1人として取り上げられる。南蘭子は、「整わなくともその心を見せた歌」を望むのであるが、石郷岡の歌にはそれがあり、特に『病床から』(大正 13 年)が推賞できるとした。また、歌作に対する熱心さに敬意を表している。「黎明」の中の女流三歌人の一人とされる。

昭和5年1月に、県下の文芸誌を統合した「座標」が創刊されるが、石郷岡は「黎明」に引き続いて作品を発表する。

戦中は府下吉祥寺に住み、洋裁研究所の門下生を「地上」に出詠させるなどの活動も行い、終戦後、弘前市の叔父宅に疎開する。逝去する昭和 22 年までのわずかな間ではあるが、津軽地方の歌人たちとの接触も持った。22 年4月、弘前市で逝去。享年 47。